欧米における浄土真宗の葬儀事情

―葬儀の意義を求めて―

佐々木　惠　精

一　はじめに―近年の葬儀事情

人間の一生において節目となる出来事（あるいは行事）として、誕生、成人、結婚、葬儀などがあげられる。これらはいずれも、対象となる人物本人のための行事のようであるが、実のところはそれよりも、本人を含む身近な社会を形成する共同体（家族、親戚、あるいは村など）の営みであり行事であると言えるであろう。そもそも、「人間」という語は人の世界、人の社会を意味するといわれ[1]、人間は社会的動物であるという視点からして、そのように見られるのである。表向きには、本人を対象とする人生の節目を通過する行事のように見えるが、このような人生の節目を見つめることが人生そのものを見つめ、深め豊かにする場となるという意味では、対象者本人も含めてその節目の姿、行事を通して共同体の成員それぞれが自己を、人生の意義を見つめ、深めて人生にいろどりをつけるということになる、それがこのような行事であり出来事であると考えられるのである。とりわけ、人生最期の死を迎え、生きること死ぬることに直面する出来事が葬儀の場であり、残る者にとって故人を悼むとともに人生そのものを見つめる大きな意味を持つものとして重要であるといえるだろう。人間だからこそ、

すなわち共同体を構成して生きる存在であるからこそ、構成員の最期を見つめる営みは重要であり不可欠であるというべきであろう。

ところが、最近とりわけ葬儀は不要であるという声が強くなっている。それは、科学技術の急激な発達によって、人間を見つめるにも科学的知識のもとで捉え、また科学技術の成果を得てその利便の上に、人と人の繋がりよりも、優れて器具・機械を相手にすることになり、人間関係が疎遠になる傾向が見られる。さらにはそのためだろうか、核家族化が進んで、家族や親族が集うとか、共同体の成員が集うという営みが軽視されてきているようである。かくして、葬儀のような行事を軽んずる傾向が出てきているとみられる。

そこで、仏教の教義からすれば、どのように見られるか。たとえば、釈尊は涅槃に入られる直前に「葬儀」について、阿難が「ご遺体をどのようにしたらよいのでしょう」と尋ねるのに対して、次のように指示されたといわれる。[2]

お前たちは修行完成者（如来）の遺骨の供養にかかずらうな。……正しい目的のため努力せよ。……修行完成者（如来）に対して浄らかな信を抱いている人々がいる。かれらが修行完成者（如来）の遺骨の崇拝をなすであろう。

すなわち、出家して仏道を歩む仏弟子である比丘・比丘尼は葬儀にかかわることなく、自らの自己解脱の修行に専念するべきであることを示された。ただし、一般人として釈尊に尊崇のこころ（浄らかな信）を抱くものが遺体の供養をなすであろうと言われて、世間的なあり方としては葬送がなされる意義のあることを示されたとみられ、葬儀などを全く否定されているわけではないことが知られる。実際、仏弟子たちは迦葉尊者が「ブッダが常々説かれたようにこの世が無常である」と説くのを聞きつつ、マッラ族のものがとりおこなう釈尊の火葬に立ち合っている。[3]

また覚如の『改邪鈔』には、没後葬礼をもって肝要とし、往生の信心を軽んずることを誡める中で、宗祖は「閉眼せば賀茂河にいれて魚にあたふべし」[4]と言われたことが示されている。これもまた、仏教の道を学ぶということからすると、葬儀などは第一義的な営みではないということを示しているといえるだろう。しかし、釈尊の葬儀（火葬に付してストゥーパを建てる）を一般の仏教徒たちが執り行い、仏弟子たちもその場にあって釈尊に礼拝の儀礼をなしており、宗祖の葬儀についても、末娘の覚信尼のもとで厳かに執り行われ、その後の法灯を伝える機縁となったのである。葬儀という儀礼を厳修することが生死を深く受け止め仏法を身に受ける大事な機縁となることは事実であり、そこに重要な意味があるのである。

そこで、本小稿で、海外念仏者に出遇う機会をいくらか持っている筆者として、海外、とりわけ欧米の念仏者たちの葬儀の事情をうかがって、このような葬儀の意義を求めてみたい。ただし、欧米のわずかの知人である念仏者への問い合わせに寄るのみであるため、十分な考察ができていないことをお断りしなければならない。その中で、ドイツのデュッセルドルフにある恵光ハウス・日本文化センターの青山隆夫所長が現地で葬儀を執り行われた事例をまとめてくださったので、その論稿を本小稿に参考として添付し、欧米の葬儀事情を紹介する一部とする。

二　北米開教区での聞き取りによる葬儀事例

北米など、浄土真宗本願寺派で開教区が開かれている地域では、周知の通り、すでに百年以上の開教区の歴史があり、それぞれに伝統を持っている。その中で、北米開教区（ＢＣＡ）のローダイ仏教会（Buddhist Church

of Lodi)[5]の楠活也開教使より聞き取りさせていただいたデータに寄りながら開教区での葬儀の事情を概観する。葬儀の事情について、二〇一三年八月に北米開教区の開教使たちにアンケート調査をされ、二十七名の開教使から返答があったとのことで、その成果を含めての概観である。

北米開教区では、各寺院（Buddhist Church）に、葬儀委員会（Funeral Committee）が設置されている。寺院によってその構成などに相違があるが、主として住職（開教使）、開教使補、寺院のメンバー（日本の門徒にあたる）の代表などで構成しており、寺院のメンバーの逝去に際して委員会が葬儀の準備から執行について采配することになる。また、各寺院で葬儀の準備、手続きなどの基本的な説明をまとめたマニュアルともいうべき葬儀要綱（Funeral Information）を用意しており、葬儀に先立ち遺族にこれを差し上げて葬儀の前後の準備、僧侶などへの対応を円滑に進めるようにされているとのことである。各寺院によっていくらか相違があるが、そこには、おおよそ次のような事項が示されている。

① 家族に不幸が起こった場合、直ちに住職と葬儀委員会委員長（連絡先を明記）に連絡する。同委員会は、葬儀などの準備を支援するために、すぐにその家族を訪問する。

② 死者儀礼（葬儀）のガイドライン＝（1）医師か検死官に連絡、（2）僧侶（住職ら）に連絡、僧侶は〔故人の枕元で〕「枕経」を勤行、連絡用の電話番号など確認、（3）葬儀場に連絡（自宅での逝去では家族が医師、葬儀場に連絡）、（4）〔近年は葬儀より追悼形式が好まれるがその場合は初七日法要を追悼式に含むことがある[6]〕葬儀では、遺族が初七日を葬儀直後に勤行するか、七日目にするかを決定する、その上で葬儀の日程の決定、法名〔すでに受領しているなら、僧侶に〕の伝達、日系新聞への死亡記事（希望する場合）伝達、（5）葬儀情報の提出（決められた表に、故人名、葬儀導師名、喪主名、主な参列者、焼香順などを書き込む）、（6）葬儀委員長の許で葬儀全般を準備（火葬・土葬の決定から役所への届け、葬儀

場に示す情報の確定など）、（7）お花・供物などの準備、（8）お斎の準備。

③ その後の法要（中陰、百か日、祥月命日、一周忌、さらに年回忌）の日程などの決定。

④ お礼のガイドライン＝一応の目安として、お葬儀、中陰では寺院に四〇〇ドル、僧侶に一〇〇ドル以上。一周忌では寺院に一〇〇ドル、僧侶に一〇〇ドル以上。その他の法要では寺院に一〇〇ドル、僧侶に七五ドル以上。これらはあくまで目安に過ぎない。

葬儀にあたっては、葬儀次第を記したリーフレット（故人の氏名と肖像写真、葬儀の日時、場所、葬儀式の次第のほか、故人について略歴と追悼のことば、法語、「白骨章」の英訳などをおさめる記念の小誌）を参列者に配布しているとのこと。また、遠近各地の親族、知人たちが参列できるように、亡くなってから数日後の葬儀式となる、あるいは二、三週間後に、さらにそれ以上経ってから葬儀を行うことがしばしばとのこと。カナダ開教区もほぼ同様の葬儀がなされているが、ここでは省略する。

浄土真宗の開教使たちが執り行う葬儀であり、日本国内と同様に基本的に葬儀規範に基づいた勤行次第となるが、アンケート調査によると、次のような諸点に相違がみられる。

葬送儀礼として勤められるのは、浄土真宗本願寺派の『葬儀勤行集』（その英語版 *Funeral Service Book* による）によって、主に、臨終勤行（枕経）、納棺勤行、通夜勤行、出棺勤行、葬場勤行、火屋勤行、還骨勤行、そして中陰（七七日法要）が厳修されることになっているが、ＢＣＡでは寺院（Buddhist Churches）の八〇～九五％が、納棺・通夜・出棺・還骨の勤行を省略し、臨終勤行、葬場勤行、火屋勤行、中陰法要を厳修するとしている。また、勤行は、葬場勤行に正信偈を、そのほかには重誓偈を読経するのがほとんどである（わずかに三奉請、念仏、回向などを勤行する事例がある）。米国の文化、風土に応じて、あるいは遺族の状

況に応じて変更されるのであろうと思われるが、開教使の意見では、葬儀の時間が長くなりすぎ、故人を偲ぶ、そして仏法に耳を傾けるための集中力が失われるので、短い時間の勤行を選んでいるとのことである。また、開教使が、添引念仏、添引和讃などをしっかり修行できないこともその理由の一つであり、さらに多くの遺族や知人が故人の思い出（Words of remembrance）や故人への賛辞（Eulogy）を次々と語ることになるので、葬儀時間が長くなるということであった（その時間を取りたいため短い勤行にするとのこと）。

全般的に、米国においても、仏教系のみならずキリスト教系などでも、「葬儀離れ」が進んでいるとのことで、宗教者抜きの Informal Celebration of Life とか Appreciation of Life などと呼ばれる「お別れ会」を行うとか、そのような会もしないでただ火葬にして納骨だけ行う家族も現れてきている。ドイツからの報告にもあるように、このような事態にどのように対応するべきか、葬儀の意義をどう捉えるか、が喫緊の課題である。

三　スイスの信楽寺での葬儀事例

ヨーロッパには現在七か国に小さいながらも「浄土真宗協会」（Shin Buddhist Association）と呼ぶことが出来る念仏サンガが生まれている。その中でも、スイスのジュネーブ、ベルギーのアントワープには、ビルの一角であるが「寺院」と呼べる、本堂を持つ施設があり、念仏道場としての活動がなされている。その中で、スイスのジュネーブの事例を見よう。

ジュネーブの中心街にあるマンションビルの一角に本堂を開く信楽寺は、創立者のジャン・エラクル（一九三〇-二〇〇五）の跡を継いで、ジェローム・デュコール（西本願寺で得度、教師を取得、存覚研究で博士号取得）が信楽寺代表（住職）として活動する。彼は日本語にも通じていて聖典を漢訳や日本文などの原語で読み、また

フランス語に翻訳しており、葬儀に関しては浄土真宗本願寺派発行の『葬儀規範』をフランス語訳して手元の葬儀マニュアルとしている。これまで、滞在している日本人の依頼を受け、または仏教に帰依しているスイス人に依頼されて、仏教徒の葬儀を、あるいは非仏教徒の葬儀や、また無宗教の故人・遺族の葬儀をも執り行ってきた。実際の葬儀においては、この『葬儀規範』に基づいて葬儀を厳修している。ただし、故人、遺族の状況に応じて葬儀の進め方は変更するとのこと。たとえば、家族のほとんどがクリスチャンであれば、初めにクリスチャン方式でお葬儀を挙行（牧師が神に礼拝する儀礼によって執行する）し、続いて仏教式でお葬儀を厳修する。もちろん、それは浄土真宗の規範に基づいて執り行う。勤行は、日本の勤行と同じ方式（日本語のままの読経）であるが、遺族たちが「正信念仏偈」などにまだ親しんでいない場合は「讃仏偈」を勤行する（短時間で参列者が唱和しやすいからと見られる）とのことである。最後に、法話を行うが、クリスチャン方式の葬儀をはじめに執り行った場合は、初めに牧師の言葉（法話にあたる）をいただき、それに続いて僧侶としてデュコールが法話するということになる。牧師は、仏教の法話を聴聞し、「大変素晴らしい話だった」「厳かな葬儀だった」と称讃のことばをかけてくれるとのことであった。クリスチャンの遺族たちも感銘のほどを語ってくれるとのことであった。

ヨーロッパでは、一家族の中で、クリスチャン、プロテスタント、イスラーム、仏教など、複数の宗教帰依者が混在している場合が増加している。彼等は、家族内でお互いに相手の宗教について、それぞれの帰依を尊重しあっているという。そのために、真宗サンガのメンバーの葬儀でも、家族がクリスチャン、プロテスタントなどであれば、葬儀は、クリスチャン方式、プロテスタント方式の葬儀を執り行い、続いて仏教（真宗）の方式で葬儀を行うというようにしているというのである。

四　ベルギーの慈光寺での葬儀事例

アントワープには、築一〇〇年余りの四階建てビルの一角を浄土真宗寺院「慈光寺」として開設し、一階に阿弥陀如来立像をいただく本堂を、二、三階にセミナー室などを整えている。創始者のアドリアン・ペル（一九二七-二〇〇九。西本願寺で得度、教師を取得、横超院釋至徳、二〇〇九年九月二十日往生）が設立当初から仏教セミナー、真宗セミナーなどを開き、また北フランスからオランダ周辺まで自家用車を走らせて伝道にまわっていた。その後継者のフォンス・マルテンス（西本願寺で得度。釋大乗）のもとで寺院としての整備が進められている。

葬儀については、二〇〇六年に二回の勉強会を持ち、慈光寺メンバーの葬儀を、あるいは当地近郊で「お葬儀」を依頼された場合に、その葬儀を、いかに執行するべきかを、日本や米国で刊行されている資料[7]によりながら学習し、協議したとのことで、その結果、基本的に次の七項目を執り行うこととしたとのことである。

①枕経、②通夜、③葬儀、④法事（初七日、四十九日、百か日の法要）、⑤納骨堂（廟所。納骨）、⑥法名〔伝達・披露〕、⑦院号〔伝達・披露〕

このうち、①～③は、（本尊としての）六字名号と三具足を備えた小さな仏壇を用意して、病院や、遺族の自宅（あるいは慈光寺）で葬儀を執り行うものとする。故人を偲ぶしおり（三つ折り程度のリーフレットで、故人の肖像写真、略経歴、式次第、法のことばなどを記す記念品）を用意する。火葬か土葬（埋葬）かについては、故人あるいは遺族の意思で決めていただく。……以上のような合意を得た。

勉強会の席上、慈光寺創始者のアドリアン・ペルは、「これらの行事（葬儀の法要）は、単に故人のために執り行うのでなく、あとに残る遺族や我々のために行うものである」と強調されたとのことであった。ペルの主張は、「葬儀は、故人を供養する追善供養というものでなく、遺族や我々参列者が仏法に出遇い仏法聴聞する場であり、その機縁を与えられる場であって仏法に出遇ったものとしては、仏徳讃嘆、仏恩報謝する行事である」という意

義を強調されたものとうかがうことが出来る。クリスチャンの葬儀が〔故人のためというのでなく〕「神に感謝の礼拝をなす儀式」であるといわれるのと同様の意味を持つといえるだろう。

ベルギーの慈光寺での葬儀は、二〇〇九年九月の、創設者アドリアン・ペルの葬儀が最初となった。スイスから信楽寺代表のジェローム・デュコール、ドイツの真宗協会の代表者たちも駆けつけて、右にあげるように日本の浄土真宗葬儀とほぼ同様の形式で厳修されたとのことであった。

マルテンスによると、ベルギーの宗教事情はおおよそ、カソリックが人口の五七％、プロテスタントが一・七％、ギリシャ正教会が〇・三％、イスラームが四％、仏教が二％、無宗教が三一％で、教会離れ、宗教離れが進行しており、それが理由に挙げられるかもしれないが、「葬儀離れ」が進んでいるとのことであった。慈光寺では、仏教を学ぶ大事な機縁である葬儀を重く受け止めているということであった。

五　ドイツでの葬儀事例

前述したように、ドイツにはデュッセルドルフの郊外に、一九九〇年代に（財）仏教伝道協会によって恵光ハウス・日本文化センターが創設されてある。本願寺様式になる大本堂と日本家屋、日本庭園を備えた一大施設である。日本とヨーロッパの仏教文化交流の拠点として設立されたものである。一九九二年に浄土真宗本願寺派の前門主が臨席されて入仏法要がなされ、一九九五年には全施設が完成した。その第二代目の青山隆夫所長がここ数年の間に執り行った「ドイツでのお葬儀」の事例（二回）を紹介する報告記事を執筆し、当方に提供いただいた。これを本小稿に参考として添付することを了承いただき、これによってドイツの葬儀の紹介とする。

二事例のうち、第一の事例は土葬の場合で、埋葬場（当然のことながら、クリスチャン系の墓地）にある会堂

で執り行うので、六字名号と三具足を持参して葬儀を執り行い、埋葬用に開けられた穴に遺体を埋葬したとのことである。勤行は、日本式（讃仏偈の読経）で、最後に「御文章」（白骨章）を日本語で朗誦し、その後の法話の中でその意味をドイツ語で伝えるということであった。

第二の事例は、火葬で遺骨となった後で執り行う葬儀であった。火葬にされてから数日して（場合によっては一、二か月後のこともあるとのこと）の葬儀である。[8]

交通事故に合って死期の近いことを知った青年が、かねてから仏教式の葬儀を願っていて恵光ハウスに葬儀を願い出てきたということである。第一例と同じく、讃仏偈の読経、「御文章」（白骨章）の拝読、そして法話を主とするものである。そして、遺骨の瓶を墓地に埋葬するまでが、一連の「葬儀」となる。詳細は青山所長の報告記事を参照されたい。

六　結びにかえて

欧米における浄土真宗系の葬儀事情について、わずかの事例、しかもたいへん大まかな紹介であるが、ここに紹介してきた。いずれも、仏教に帰依し、とりわけ浄土真宗に帰依、あるいは傾倒する故人や遺族がかかわる葬儀であり、基本的に日本国内の浄土真宗本願寺派の葬儀と変わらないともいえるが、それぞれの国の文化、伝統によって相違がみられる。大きな相違点は、遺族や知人が故人を偲ぶ心から、厳粛な葬儀の勤行に誠心誠意をもって参列・参拝し法話に耳を傾けて、故人を偲ぶ言葉、思い出を語る時間を取っていることであろう。そのために勤行は比較的短い讃仏偈、重誓偈を厳粛に勤行するのである。

聞き取りの中で、

① 欧米はキリスト教文化圏として、その教義に基づき土葬に付するのが本来であったが、二〇世紀初頭あたりから火葬が認められるようになり、今や火葬が大勢を占めている。土葬で埋葬するには、埋葬場が限られていること、埋葬に多額の費用が掛かることも火葬が多くなってきた理由の一つとされる。

② 欧米においても、一般的にいわゆる家族葬、直葬や、お別れ会などが増えてきていて、宗教色が希薄になってきている。

という実状を知らされた。しかし、北米や、ベルギー、スイス、ドイツなどの浄土真宗系のわずかな葬儀事例をうかがうだけでも、身近な人の別れを厳粛に受け止める場として、葬儀が大きな意味を持っていることを知ることが出来るであろう。

科学技術の急激な発達によって物質文明を謳歌している現代は、人と人のふれあいが希薄化し、ほとんどすべてが機械を相手とするという生活様式になっているが、冒頭に述べたように、社会を形成し共同体をなしてこそ人間であるといわれるのである。その人間の営みの最大の節目である「死」の問題を、我がこととして受け止めるためには、家族、知人らの共同体によって「葬儀」を厳粛に執り行うことが大事であると考えるのである。故人の「死」を受けとめて、人間の「生死」を深く見つめまともに受け止める、その大事が「葬儀」に凝縮されているといえるであろう。

【註】

(1) 和辻哲郎『人間の学としての倫理学』(一九三四年、岩波全書)に、本来「人間」という語が社会、世界を意味するとし、人間が社会的存在であることを基礎にして倫理学を論じられたことは名高い。

(2) *Mahāparinibbānasuttanta* (ed. in Dīgha Nikāya, Vol. II, PTS, 1966), Ch. 5, #10：中村元訳『ブッダ最後の旅』(岩波文庫、一九八〇年)一三一頁。(…)は筆者の追加。

（3）前掲『ブッダ最後の旅』一七一・一七三頁。
（4）『改邪鈔』第十六条（『註釈版』九三七頁）。
（5）ローダイはカリフォルニア州のサンフランシスコから東へ一〇〇キロ入ったあたりの街。
（6）一般的に、故人の遺体とともに勤めるのを葬儀、火葬に付した後、一、二週間後あるいはさらに一か月ほどを経てから営まれる葬送の儀を追悼式と呼ぶようだが、後者は勤行を比較的短くして弔辞、法話に続いて親族、知人の追悼、思い出のことばなどが長くなる。後述するように、離れて居住する親族らが参集できるよう、死去の後一、二週間してからの葬送の儀となるが、それでも葬儀法要として葬儀規範通りに厳粛に勤行されることもある。
（7）浄土真宗本願寺派発行の『葬儀規範』や *Jodoshinshu A Guide* 北米開教区（ＢＣＡ）などで発行している葬儀関係の資料、ウェブ上に公開されている資料など。
（8）米国などと同様に、各地に住む遺族や知人が参列できるように、日程を選ぶため、逝去の日から相当遅れてからの葬儀となるとのこと。

〔注記〕葬儀の事情に関する情報
①ウェブWikipedia(the free encyclopedia) 上で、諸宗教における葬儀事情が概観されている：http://en.wikipedia.org/wiki/Funeral_service
②ここでは、左の諸氏への聞き取りによって小稿とした。ここに深謝する。
Rev. Katsuya Kusunoki, Rodi Buddhist Church, USA; Rev. Tatsuya Aoki, Bishop of Jodo Shinshu Buddhist Temples of Canada; Rev. Jérôme Ducor, Shingyoji, Geneva, Switzerland; Rev. Fons Martens, Jikoji, Antwerpen, Belgium.

〔参考〕

ドイツにおける葬儀

恵光ハウス・日本文化センター所長
青山　隆夫

すでに二〇〇七（平成二〇）年六月船橋・浄明寺『宝林』永代経特集に「巡礼の町での葬儀」と題した次の報告をしたが、私にとってドイツ人への初めての仏式葬儀だったので、以下に途中を省略して再度紹介しておきたい。

一、今年（二〇〇七）一月二八日、デュッセルドルフから車で一時間ほどのケヴェラールという町へ葬儀にでかけた。そこはライン河をさらに下ったオランダとの国境の町で、カトリック教徒の巡礼地である。今も毎年聖母マリアの礼拝に、ドイツばかりでなくベネルクス、フランスから五〇万人の巡礼者がやってくるという。この町で、父親の葬式を仏式でやってほしいという電話での依頼を受けたのは一週間前のことだった。

カトリック巡礼の聖地で仏式葬儀を行うことに、いささか奇妙な感じを覚えたが、ともかくお名号、三具足、引磬をもって若い同僚の山田とでかけることにした。

故人は癌で亡くなった六七歳の元教師で、インド、タイ、ヴェトナムをはじめ、チベットへ旅をし、仏教への関心をふかめた。自分でも絵をかく趣味人で、住まいにはその筆になる風景画が壁にかかり、孫と自転車で原野を走っている写真がテーブルに飾ってあった。遺族は、奥さん、息子夫婦、娘夫婦とその二人の子どもたちであった。電話をよこした息子さんは南ドイツ・ミュンヘンで保険会社に勤務、夫人はイラン人。娘さん夫婦は近くの町でレストランを開いているとのこと。「我が家は、仏教、カトリック、プロテスタント、イスラムの宗教が混じった家族構成です」と、電話でも聞いていた。一家族に多宗教が混在することは、現在のドイツの宗教事情を表したものである……。

さて、ケヴェラールの墓地にある会堂での仏式葬儀には、故人ゆかりの人々が五、六十人参加された。私たちは白衣に黒衣、五条袈裟という装束で式場に入った。会堂の正面より右手におかれた棺の横のテーブルに、お名号と三具足で祭壇をしつらえて、讃仏偈を読誦した。山田が白骨のご文章をあげた。それから私は、遺族にお悔やみの言葉とデュセルドルフの仏教寺院からこの葬儀にきたことを述べ、故人が長年東洋の思念に理解を示し、仏教に帰依するにいたったことにちなんで、「釋善念」という法名をつけたことを説明して法話とした。

故人の好んだ音楽が会堂に響くなか、喪主は故人の生涯を振りかえり、しめやかに挨拶をおこなった。最後に参列者一同によって「主の祈り」の言葉が称えられて、葬儀はおわった。一月末の暖房のない会堂は寒かった。

棺を故人の友人たち四人が肩にかついで、三百メートルほど離れた埋葬の場所にむかった。二メートルほどの深さの穴がすでに掘られてあり、ロープで棺がゆっくりと地中におろされた。

ここで私たちは、三帰依文をとなえて合掌した。参列者はそれぞれが手にした花を手向け、シャベルでひとすくいずつの土を棺にかけて、しずかに墓地を去った。

映画でみなれたキリスト教の埋葬の場面であったが、自分が立ち会う機会は初めてだった。故人の長年の友人から、これまで経験のない仏式葬儀へ感謝の言葉をかけられた。

それにしても、マリア信仰の巡礼地で仏式葬儀を行うことで、仏教がドイツにおいても受け入れられつつあることを実感し、デュッセルドルフに浄土真宗寺院があることの意義について改めて考えた。

その後、近くのレストランで遺族、参加者と軽食の場がもたれ、そこでイスラム教である喪主の夫人とも話をする機会をもった。年に一度はミュンヒェンから夫の故郷を訪れ、仏教徒である舅ともよく理解しあっていたとのことだった。いずれ恵光寺も訪ねたいという。

一九六〇年代西ドイツに外国人労働者としてトルコ人が大量に受け入れられてから半世紀をへて、イスラム教徒が徐々にふえ、各地にモスクが作られている。目下、隣のケルン市に大きなモスク建設の計画があり、市民の複雑な反応が問題となっている。

イスラム過激派によるテロへの警戒はあるが、ヨーロッパ世界にイスラム教がますますひろまっていくことは明らかである。ヨーロッパはすでにマルチカルチュアの世界である。仏教がヨーロッパに定着することも、同様にすすむことであろう。

喪主は、その後私たちを巡礼の会堂へと案内してくれた。一六四二年に建てられた小さい祠は、一六五四年に立派な正六角形の会堂となり、安置された小さな銅版画マリア像は、見事な銀細工の中に飾られてあった。

以上私にとっては、カトリックの巡礼地で、仏教徒の葬儀を行い、さらに墓所で棺が土中に埋葬される儀式に立ち会ったことは記憶に残ることであった。しかもマルチカルチュア的な宗教事情がドイツでアクチュアルな現象となっていることに、気づかされたことだった。

二、もう一つ、今年行った火葬による埋葬について簡単に述べ、ドイツにおける仏教徒の埋葬の例とする。

二〇一三年五月上旬に隣市にある葬儀社から電話があった。交通事故で亡くなった二十代の青年の葬儀の依頼である。くわしくは母親に話を聞いてほしいとのことだった。翌日母親が恵光センターにみえた。息子ジャン・ピエールは昨秋交通事故にあい、ことし四月末に亡くなった、生前の遺言に従い仏式の葬儀をお願いしたい、故人は半年の間に自分の埋葬の希望を作成したと、写真入りの文書を置いていかれた。

それによると、ジャン・ピエール二八歳は十月中旬の事故により「新たな存在」となり、すでに自分のお骨入れをワイマールに注文している。写真にあげられた黄金色のハートを示す瓶には、自分とゆかりをもつ人々との、永遠の愛がこめられている。柔術(日本の武道?)の稽古の前に精神を集中する術を学び、

やがて東洋の瞑想に触れ、ダライ・ラマの著書から心の平安をえる教えにひかれたとある。

父親はドイツ人、母親はフランス人、ノルマンディ海岸で夕日を掌に受けとめている写真の上方に、「わが告別のため」と書いてある。

私は、フランスで教育をうけたと思われるこの青年のブロークンなドイツ語の文章に心をうたれた。交通事故で病床にある恐れ、嘆きの葛藤は一切ない。黄金色の光に包み込まれた平安がのべられ、自らの生と死を穏やかにとらえている。

例年になく肌寒い五月下旬の曇空の朝、私は連れの若い僧侶江田と白衣・布袍に草履で隣市の墓地付属の礼拝堂へむかった。

式は十一時に始まった。故人が好んだ曲が会場に流れ、それが終わると私たちは名号をかけた祭壇に向かい讃仏偈のお勤めをし、江田が白骨の章をよんだ。

故人は仏教に帰依し、その遺志にこたえてここに仏式葬儀を行うことを話し、白骨の章をドイツ語で説明して、光に包まれた阿弥陀仏の西方浄土へ、故人は旅立ったとのべた。

またしばらく曲がながれ、柔術の先生が故人をしのぶ言葉をのべた。母親、兄弟がまず祭壇にむかい一人ずつ別れの黙礼をし、参列の客が順にそれに続いた。満員で後ろに立ち続けていた若者たちまで残らず前に進み出た。その間曲は何度か繰り返された。

今にも雨になりそうな中を、母親と兄弟によって抱えられた瓶に従って、私たちは数百メートル先の墓所へむかった。そこでは、私は三帰依文をあげ合掌した。小さく掘られた墓の穴に瓶を据え、フランス・ノルマンディから持ってこられたという砂を母親、兄弟が少しずつかけ、参列の人々もそれにしたがった。大勢の人がひとつかみの砂を添えるまで私たちは墓の前に立ち続けた。小柄な老人が、感銘深い儀式であったと一言のべて去った。

半年の病床で平穏な心をたもち、自分の埋葬について心をくだき、仏式の葬儀を行い、自分の好きだった曲をながし、多くの知人との別れの場を用意して、特別にワイマールからとりよせた骨瓶をフランス海岸の砂でうめ、去って行った青年の覚悟に感心するばかりだった。

私は薗田宗人教授の後をうけて二〇〇二年夏にデュッセルドルフの恵光日本文化センターに来てはや十一年になるが、その間に十一回葬儀を行った。

三、　次にドイツにおける葬儀について、恵光センターのセミナーで取り扱う機会をもったので簡単に紹介する。

二〇一〇年にボンにある福音派アカデミー教授リー・リンケという方から、メールで「埋葬文化―今日のキリスト教と仏教」と題するセミナーに恵光センターも協力をしてほしいと要請された。

ドイツのみならずヨーロッパ諸国で埋葬の宗教的意義が次第に失われ、多くの人がキリスト教の伝統である土葬より仏教に由来する火葬をとるに至っている。また埋葬は樹木葬、海上葬、

宇宙葬等々におよび、葬儀費用も重要な問題となっている。そこでキリスト教、仏教の現今の在り方についてセミナーを開くのだという。

死後の復活を信じるキリスト教徒にとって遺体を灰にすることは、まさに信仰にもとることであろう。この際に火葬を埋葬の伝統とする仏教のあり方を示すのも大事と考え、八月二十八日午後二時から五時まで恵光センターを会場として、四十人ほどの参加者に寺院紹介と仏教の埋葬について話すことにした。

ちょうど日本でも、『朝日新聞』がこの年四月に「人・脈・記」というシリーズで特集し、また『中央公論』五月号では「平成『お葬式』入門」としていくつかの論考があげられて、葬儀がメディアのテーマとされていた。二〇〇八年外国映画オスカー賞を滝田洋二郎監督、本木雅弘主演の『おくりびと』が得たことから、葬儀はもはやタブーではなくなっていたのであろうか。

さて、仏教の葬儀についてスライドも交えた講演に、ドイツの葬儀会社の経営者が多数を占めた参加者は、仏教の葬儀の意義とあり方について違和感もなく理解されたようだ。

『おくりびと』の映画のように、死者は清められて納棺され、親族、友人が別れの場となる通夜、葬儀についてのべ、火葬、骨あげ七日法要、中陰法要をへてお骨瓶を墓に納めるまで、遺族が故人をしのぶ仏教のしきたりについて話した。

一九四五年日本の敗戦以降、新憲法で公教育において宗教教育が禁止され、一九六〇年代から大都市への人口集中、核家族化、農村の過疎化に伴い、かつての共同体意識がうすれ、構成員の喪失を惜しみ、人柄をしのぶ機会が失せつつある。また、費用負担という経済的な問題からも、直葬と称することさえ行われることがテレビでも報じられている等々。

最後に恵光寺の埋葬場を紹介したい。本堂の左側の緑地を墓地として、そこに骨瓶を埋葬する。デュッセルドルフ市公安局は恵光寺の墓地を認め、個人埋葬は二十年、それを超えると共同墓地に移すこととされた。墓碑を建てるには狭いので、骨瓶を直に埋め、南無阿弥陀仏、名前、没年を刻んだほぼ二十五センチ四方の石板を上におく。現在は三人の方の骨瓶が埋葬されている。また「倶会一処」の石碑の下に安置堂を設け、デュッセルドルフにご縁のあった方々の分骨をお守りできるようにした。

セミナー参加者たちはドイツの葬儀とくらべながら耳を傾けられたようだ。最終的な報告をボンから得ていないが、仏教の立場を伝える良い機会となったと思っている。

さて、手工業における徒弟・マイスター制という職業教育の伝統をもつドイツで、葬儀業が職業としてどのように営業されているのだろうか。

以下にインターネット検索等により得た資料から、おおよそのことを報告する。[1]

一九世紀に入るまでは、死者の取り扱いは家族の役割であったが、衛生・民事上に厳しい規程が制定されると、個人としてはもはや対応できなくなって、一八七〇年ころ都会で自営の葬儀業の成立を迎えた。二十世紀になっても葬儀業教育は個々の

業者によって行われてきた。つい一九九六年以降、それぞれの自治体の手工業会議所が行う職能試験に合格したものが葬儀業者と認められることとなり、二〇〇三年八月一日から葬儀業は、国から公的に認可された教育による職業と規定されるに至った。

すなわち義務教育八年以上を修了したものが、葬儀社と墓地管理施設において三年間の実地教育、その間に全国で三カ所にある専門職業学校でも、二、三週間のブロック授業を受ける。この三年間に、初年次には月額四〇〇ユーロ、二年次四五〇ユーロ、三年次五〇〇ユーロの手当てと、さらには専門職業学校への交通費、宿泊費、食費等の支給をうける。こうして試験に合格すれば、葬儀業の職人となる。

二〇一〇年一月一日から、さらに専修施設での研修により、経済省規程による「葬儀マイスター」の称号を得ることができるようになった。そのカリキュラムには、墓所と墓地に関する経理上の知識、死者の衛生上の処置法、葬儀における弔意の心理学、遺族との対応の仕方等について教授される。[2]

以上のような葬儀の職種に関する新たな法的な措置に、従来の業界も対応を迫られることとなったのであろう。上述の二〇一〇年に葬儀業者がボンにおけるセミナーに参加したことも、この措置と呼応していると考えられる。従来の葬儀業者も、今後は認定葬儀者、マイスター等の上級資格証明を目指すことになる。

さて、仏式葬儀と骨瓶の埋葬を自分の遺志としたジャン・ピエールのように、近年では火葬が増えている。ドイツで火葬場ができたのは一八七八年ゴータ市で、一八八六年にカトリック教会は火葬を野蛮な仕来りとして否定し、教会での火葬者の葬儀は受理しなかった。しかし戦後一九六三年には、土葬を推奨するが、公式には火葬の選択も認めることになった。

ドイツ葬儀協会連盟の統計資料によると、一九九九年に火葬は旧西ドイツにおいて三八・一％、旧東ドイツでは七五・三％であった。二〇一一年の資料[3]では、ますます多数のドイツ人が火葬を選んでいる。地域的にみるとプロテスタントの多い北ドイツ、東ドイツでは火葬が、カトリックの優勢な南ドイツではいまだに土葬が多い。しかし次第にカトリック教徒が主流をしめる地域でも、両者の比率は拮抗している。一九九〇年代終わりころまだ三分の一であった火葬が、二〇〇八年から二〇一一年にはドイツ全土で五五％となっており、特に東ドイツだけをみると八十％を超している。

具体的にミュンヘン市の数値をあげてみよう。以下に二〇一一年二月のミュンヘン市埋葬係、ペーター・コッバウアー氏の談話を簡単に紹介する。[4]

ミュンヘン市厚生委員会報告によれば、ミュンヘン市にある二十九カ所の墓地でこれまで十九年間に、空墓所が二七、〇〇〇から四〇、〇〇〇なっている。墓所の充足率は九四・五％から八五・九％に下がった。その理由はますますの高齢化社会、それに伴う死者の減少、また離婚者の増大、若年親族の土地離れ、外国での埋葬等があげられる。ミュンヘンの若者はエゴイスト

なのだろうか、二〇代から四〇代の親族ではますます少数の人しか墓所の手入れをしない傾向がある、遺産は受け取れるのに、仕事はしたくないのだ、まさにドラマチックだと同氏はいう。一九九〇年にまだ三七％だった火葬が、二〇〇九年には五八％となった。十年間土葬墓所を占有する費用は年六九ユーロであるが、骨瓶の方は四九ユーロとなり、経費の面でも差がある。同市の環境厚生当局は、二〇二五年には空墓所が七六、五〇〇になると推定している。二〇〇六年から墓地での樹木葬を行っているが、それによって墓地内の森の歩行が制限されるにいたった。いくつかの墓地ではすでにイスラム埋葬場所が設けられたし、この秋には火葬の無名墓所が計画されているのだと。

同時にあげられた数表によると、土葬と火葬の対比は二〇〇三年ではすでに四八％対五二％と火葬の方が多くなり、二〇〇九年では、さらに四二％対五八％と差がひろがっている。

最後に今年肉親をなくした恵光ドイツ人職員の意見をあげる。父親はカトリック教徒で、地域は共同体の連帯意識の強いところである。亡くなる前に父は土葬でなく、火葬を希望した。固い信仰心をもった父が、棺の埋葬でないことを息子としては残念に思っている。しかし土葬で墓所に埋葬される場合、例えば五、〇〇〇ユーロの占有費用が必要である。これまで遺族は故人を弔う一連の仕来りを持ったのだが、火葬のために遺体はどこの火葬場とも分からない所に運ばれていく。およそ十日間、遺族は悼みの時間を中断させられる。骨瓶が家族のもとに戻ってきてようやく葬儀となるが、このような空白の状態は忍び難い。それ故に教会での葬儀ではなく、ただ故人をともにしのぶ集いとすることも少なくないという。

これを聞いて、ここにドイツの火葬にかかわる問題があるように感じた。実際ジャン・ピエールの場合もほぼ一か月近い間をおいて葬儀が行われている。今後日本の火葬方式を参考とした改善がはかられることを期待したい。

ドイツでは州によっても違うが、教会税として所得税の九％が自動的に差し引かれる。すべてが教会収入になるのではなく、社会福祉施設等の運営費にもなっている。信徒は生涯ずっと教会をまもりながら、死に面して不本意な選択をすることに、忸怩たる思いを持つとしてもやむを得ないことであろう。ここ数年教会を離脱する人も増えている。都会では教会を公民館に変えたり、イスラムのモスクに転じたりすることが話題となっている。ドイツでも生と死をとりむすぶ仕来りが、徐々に変わってきているのである。

【註】

ドイツ葬儀業協会連盟、新聞社のインターネット等による。

(1) Bestattungsfachkraft

(2) Bundesausbildungszentrum der Bestatter, Theo-Remmertz-Akademie Bundesverband Deutscher Bestatter e.V.

(3) Aeternitas

(4) tz-online.de Muenchner Friedhoefe